

リレー随筆

永遠に失われる前に 残された高知の昔話

中脇 初枝

小説を書くとともに、昔話の研究を続けている。日本において、よく知られた昔話の主人公は、女性よりも男性が多い。出版の影響が大きいためらしく、語り伝えられてきた昔話には女性が主人公のものが少なくない。そこで、女性が主人公の昔話を集めた昔話集『女の子の昔話 日本につたわるとっておきのおはなし』を刊行した。

高知県がジェンダーギャップが小さいということではなく、この二県で多様な昔話が数多く記録されたことの表れだと考えている。岩手県は、柳田國男が『遠野物語』を書き、その内容を語った佐々木喜善を始め、多くの研究者が、昔話研究のごく初期から昔話を記録してきた地だ。

それでは、一方の高知県ではなぜそれほど多様な昔話が残されたのか。それは、近代化の遅れも理由の一つではあっただろうが、何よりも、寺石正路、桂井和雄といった、人々の暮らしや語り伝えられてきたことに目を留め、書き残してくれた先人たちがいたためだと考えている。その系譜に、一昨年亡くなられた谷口平八郎さん、昨年亡くなられた坂本正夫さんと市原麟一郎さんがいらっしゃる。彼ら先人たちの熱意と尽力のおかげで、高知県では、永遠に失われる前に、多くの昔話が記録され、残された。

その市原麟一郎さんの展覧会が開かれるという。県内各地を昔話を聞いて歩かれ、土佐民話の会を創立し、機関誌『土佐民話』を発刊、著書も数多く、高知県に膨大な「土佐民話」

という宝を残した。

もう二十年近く前になる。高知新聞で幡多地方の昔話を幡多弁で再話して連載することになり、市原麟一郎さんが幡多地方で記録された昔話もぜひ再話したいと思った。そこで、お会いしてご挨拶したいとお願ひすると、高知の商店街を、飄々と自転車に乗ってやってこられた。そして、貴重な昔話の再話を快くお許しくださった。

それからというもの、あの絵のよ



寺石正路から中脇初枝まで～受け継がれてきた高知の昔話

うに独特な、のびのびとした字で、折にふれてお便りをくださった。戦争について小説を書くとき、参考にと高知の戦時の記録も送ってくださいました。きつと市原さんは、わたしにだけでなく多くの人たちに、こうして惜しみなく貴重な資料をご提供くださったことと思う。

それは、長年にわたり、人々の間で語り伝えられてきたことを実際に聞いて歩かれた彼だからこそ、身に沁みて知っていたためだろう。語り伝えられてきたものがいかにかけがえないものか、そしていかにたやすく失われるかを。

昔話研究の早い時期から、先人たちにより、多くの昔話を書き残された高知県。その先人たちに昔話を語った多くの人々。彼らの多くは亡くなったが、昔話は残されて、今もこの地にある。その中には、ここでしか書き残されなかった昔話も少なくない。この世界から失われていたかもしれないことを思うと、高知の昔話は世界の宝でもある。これらの昔話と出会えた僥倖に感謝し、高知の昔話を次の世代に伝えていくために力を尽くしたいと思う。

(作家)

高知県立
文学館

高知県立文学館ニュース

藤並の森

vol.

106

2024.9



企画展

好評開催中

会期 令和6年7月6日(土)～9月16日(月祝)

●午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)



創刊45周年記念 ムー展 謎と不思議に挑む夏

現在、当館では親子で楽しめる企画展としてスーパーミステリー・マガジン「ムー」の魅力を伝える展覧会を開催しています。

会場では膨大な「ムー」記事の中から、創刊45周年に合わせ45本を厳選してUFO・UMA・古代文明などカテゴリー別に紹介。記事中の「言葉」にも注目し、タペストリーやパネルなどで抜き出したほか、田中貢太郎や桂井和雄など不思議を愛した高知の文学者紹介もしています。

また、一世を風靡した「スプーン曲げ」や「ダウジング」の体験コーナーや、本物のピラミッドをドローン撮影しメタバース上でピラミッドに登って巨大さを追体験できるコーナーな



ど、約200点のさまざまな資料を展示しました。

高知の介良で中学生達がUFOを捕獲した「介良事件」の紹介や、新潟の山崎金属工業株式会社がより借用したユリ・ゲラー氏に勝った「コブラスプーン」の紹介も人気のコーナーですが、当館の所蔵資料「土佐化物絵本(仮称)」「絵本集冊」「新先生一代記」もこの機会にぜひご覧いただきたい展示です。妖怪・神霊・軍記・滑稽話などを記したこれらの資料は、伝来経緯は不明なもの、江戸末期～明治初期に記されたと考えられ、近世土佐の妖怪や風俗を知るうえで大きな役割を果たしています。



会期中は素焼きのアマビエに色をつける工作や、webムー編集長・望月哲史氏によるトークイベント、ムー編集長・三上丈晴氏と陰陽道研究者の斎藤英喜先生によるトーク&対談イベントなど多彩な関連イベントも実施。

来館されたお客様からは「オカルト」の各分野及びそれが特集された「ムー」誌面をバランスよく配置し、一つの「アート」を完成させたような展示会であった。そして、その中に「文学」の要素を見出すスタンスは、さすが文学館である。“等の嬉しいお声もいただいています。まもなく閉幕となりますが、ぜひ当館で、様々な分野に影響を与え続けている「ムー」の謎と不思議に満ちた世界をお楽しみください。

(学芸課／福富陽子)



～土佐民話よ、永遠に～

追悼 市原麟一郎先生

昨年9月24日、土佐民話の第一人者市原麟一郎先生が101歳で逝去されました。当館は平成13(2001)年に開催した「土佐のむかしばなしと伝説」展以来、土佐民話や紙芝居について教え導いていただくとともに、様々なお力添えをいただいできました。市原先生への心からの感謝と深い敬意をこめて、10月5日より企画展「追悼市原麟一郎先生〜土佐民話よ、永遠に〜」を開催いたします。

展覧会では、市原先生のお仕事を振り返るとともに、先生がこよなく愛した土佐民話の面白さ、豊かさを堪能いただける展示を目指します。

① 市原麟一郎先生の

人生101年

市原先生は大正10(1921)年生まれ。民話と出会った須崎工業学校の臨時教員時代から数えると、実に80年もの歳月を土佐民話とともに歩んできたその人生を、年表パネルや在りし日の写真、愛用の作務衣、拍子木などの品々でご紹介します。

② 市原麟一郎先生の仕事

昭和18(1943)年、1冊の昔話集との出会いからはじまった市原先生の生涯にわたる民話研究と伝承の仕事「掘り起こす」「残す」「伝える」の3つの視点からご紹介します。



ぎっしりと書き込まれた取材メモ

③ 民話のふるさと

生前当館にご寄贈いただいた、採話テープや取材メモなど貴重な資料の数々を展示します。

太平洋に大きく開けた土佐湾と自然ゆたかな山々に囲まれ、南国の暖かい気候にはぐくまれた高知には、特色あるたくさんの方々の民話が伝わっています。

このコーナーでは市原先生が県内各地を回って採話した民話の数々を、横幅約6mの巨大な高知県全域の段ボールジオラマを使ってご紹介します。

④ 土佐民話よ、永遠に

市原先生が守り伝えた民話の灯を絶やすことなく次世代に引き継いでいくため、現在活躍している民話につながる

方々をご紹介します。少女時代を中村市(現四万十市)で過ごした作家中脇初枝さんは執筆とともに昔話研究にも力を注ぎ、昔話の本を出版しています。中脇さんには巻頭のリレー随筆もご執筆いただきました。

さらにこのコーナーでは、来館者に呼びかけ、ご自身の住む地に伝わる民話を書き記してもらい、埋もれている民話を次世代につないでいこうと考えられています。

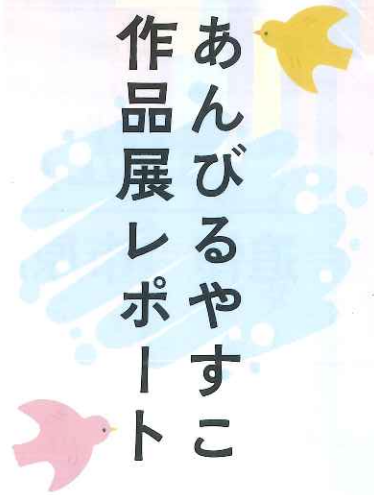
その他にもえんこうやしばてん、ヤマチチなど、土佐民話に伝わる妖怪たちをモチーフにした楽しい仕掛けを用意してお待ちしています。

ぜひ、学校や地域の皆さん、ご家族と一緒に展示をご覧いただけたら幸いです。

(学芸課/岡本美和)



あんびるやすこ 作品展レポート



6月16日、あんびるやすこ作品展が無事に閉幕しました。瑞々しい原画の数々に文学館が春らしいやわらかな雰囲気にも包まれ、あんびるさんの作品で育った20代以下の若い方から、絵に惹かれて来てすっかり虜になってしまったご年配の方まで、幅広い世代の方にご来館いただきました。言葉の一つ一つ、絵の細部に至るまで気を配ってつくられた絵本や児童文学書の魅力を存分に感じることができ、お客様のアンケートには原画や作品への感動が綴られ、読んでいるこちらにも心が温まりました。



展覧会の中で一番印象的だったのは、

やはりあんびる先生のトーク&サイン会イベントです。創作にまつわる素敵なお話を聞いた後のサイン会では、あんびる先生を前にしたファンの方々の愛、熱気、感動を目の当たりにし、作品たちがどれだけ深く長く愛されているのか、ということに改めて感じたことでした。また、そうしたファンの方々の思いをしっかりと受け止め、長丁場にもかかわらず最後まで一切疲れを見せずに笑顔で応え続けたあんびる先生の作家としての姿勢には背筋の伸びる思いがしました。

はるばる高知までお越しくださったあんびる先生、岩崎書店様をはじめ、展示にご協力くださった関係者の皆様、そして展覧会にお越しくくださった皆様に心より感謝申し上げます。

今後も文学館では、県外・国外作家を含め、素敵な作品や作家を紹介したいと思えます。興味のある展覧会を見かけたら、ぜひ、当館にお越しください。
(学芸課/川島禎子)



あんびる先生トーク&サイン会のようす

トピックス



高校生サポーター ただいま活動中!

文学館にお立ち寄りの際、高校生サポーターの名札を下げている高校生を見かけたら、ぜひ気軽に声をかけただけであらうれしいです。
(学芸課長/織田敦子)

主な活動内容

● イベント補助
企画展に合わせて行うワークショップ・講演会等の補助。

● おはなしキャラバン補助
土佐民話の紙芝居や絵本の読み聞かせ活動の補助。
読み聞かせの合間に行うクイズや、参加してくれた子どもたちに配る小物づくりのお手伝い。

● 来館者への案内
来館された方に、展示内容を解説し、鑑賞のポイントを伝える活動。
高校生向け鑑賞ポイントのプリント作り。

● 紙芝居等の資料整理



高知県立文学館では、初めての試みとして、文学作品のすばらしさを来館者に伝える補助をする高校生サポーター(ボランティア)を、令和6年度当初に募集しました。予想を大きく上回る12校36名の高校生から応募があり、現在下記のような活動を行っています。志望の動機は、文学が好き、学芸員の仕事に興味がある、人の役に立ちたい等様々ですが、何事

土佐文学さんぽ

土佐民俗学の扉を開く
詩人・教育者
桂井和雄
谷 是

今日の日本人は、文化や生活が均一化され、どこへ行っても、ほぼ、同じ食事をとり、同じ風采でいることが多い。マスコミが発達し、ローカル色が全く薄れて来た。一面淋しいような気持がするが、それが発達だと言えば、それまでだろう。しかし、百年、二百年前には、その地方へ行けば、独特の風俗や習俗があり、生活がなされて来た。民俗学の存在する所以だろう。

父・學司は高知中央卸売市場の中央青果(株)の専務をしていた。和雄は県立城東中学校(現追手前高)を卒業して、早稲田大学第二高等学院に進んだが中退。高岡郡上半山村、吾川郡大崎村、土佐郡土佐山村弘瀬小学校訓導兼校長、桑尾国民学校兼土佐山村青年学校長などを務めた。この間、人生派詩人として岡本弥太などと活躍、画家・山脇信徳装丁の『わが齡滴る緑の如くなれば』という詩集は、美的表装と高度の内容が、高く評価された。教育者として、土佐の山間に深く分け入り、昭和

七年頃から土佐民俗学の研究に没頭。渋沢敬三や柳田国男と面会、十二年橋詰延寿と「土佐民俗学研究会」を結成した。吉村淑甫、坂本正夫、徳弘勝、高木啓夫などと一派をなして「土佐民俗学」を興した。その学風は、土佐の俗信研究の重要性を、日本の俗信の基盤にして、深めたもので、膨大な論文と、30余冊の著書がある。例えば『南海民俗風情』(高知市役所・高知市観光協会)『土佐山民俗誌』(市民新書)『土佐民俗叢記・耳たぶと傳承』(高知県社会福祉協議会)『土佐風物考・おらんく話』(高知新聞社)などがあるが『土佐民俗選集』—その一・仏トンボ去来』—その二・生と死と雨だれ落ち』—その三・土佐の海風』(高知新聞社)の三部作は、和雄の学問の選集として知られる。

高知県福祉事業財団会長として、社会事業に従事、県児童福祉審議会議長、同地方労働委員会委員、同文化財専門委員、日本民俗学会評議員、昭和34年土佐民俗学会を設立、会長となった。平成元年八月九日没、八十一歳。墓は高知市高見にある。

(郷土史家)



高見山の山側、セメントのなな目の道に入り、上方に上がって行くと、筒井家の上段にある。

資料受贈報告

寄贈資料から

『あおいのヒミツ! 幻のレシビ復活させちゃいます!』

吹井乃菜作 くらでこ絵

KADOKAWA刊

2021年10月 新書版 202頁

吹井乃菜氏寄贈



吹井乃菜さんは高知県生まれ大阪府在住、図書館の司書として勤務するかわら 2021年にデビューされた児童文学作家です。今年『あおいのヒミツ! 幻のレシビ復活させちゃいます!』を含む著書 4冊をご寄贈くださいました。

幼い頃から読書が大好きだった吹井さん。大学卒業後は当高知県立文学館の学芸員として勤務。「智恵子抄展」や「棟方志功展」など硬派な企画展のほか、「土佐のむかしばなしと伝説展」や「永遠のグリム童話展」、「みる・きく・あそぶ マザー・グース展」といった子どもの視点に立った企画展も担当されていきました。結婚を機に当館を退職し大阪に転居された後は、本に関わる仕事をしたい、と図書館司書に従事されます。日々の勤務の中で子ども達の本離れを痛感し、目の前の子どもが楽しく気軽に読めるような本を書いてみ

たい、そしてワクワクするような読書を体験してほしい、との思いで小説の執筆を始めます。

今回ご紹介する『あおいのヒミツ! 幻のレシビ復活させちゃいます!』は、第9回角川つばさ文庫小説賞大賞を受賞されたデビュー作です。小説の舞台は、吹井さんが学生時代を過ごした京都。とうふ屋の一人娘・あおいと、見習いの真緒くん、神様の使いのキツネ、ククリの不思議な力でお店のピンチと、商店街のみんなを守るために奮闘する物語です。関西弁のテンポ良い掛け合いと、美味しそうな食べ物、あおい達のひたむきな姿にあつという間に最後まで読んでしまいうれしい1冊です。いつか高知を舞台にした話を書くのが夢だと話す吹井さん、こちらも今から待ち遠しいです。(学芸課/山崎真理)

受贈報告

(令和6年5月~7月) 敬称略

- ▼高知新聞社「宮尾登美子原稿」天涯の花」他
- ▼宇都宮泰然「吉井勇書簡」他
- ▼安岡正俊「流離譚を陳問から覗く」
- ▼安岡正俊著刊
- ▼朝倉和・太田亨「禅林の文学」燭頭の総集」詩の総集」に関する基礎研究」
- ▼朝倉尚著「清文堂出版刊」
- ▼常光徹・疫病と妖怪」アマビエと予言」
- ▼湯浅篤志「趣味のモダン・アラカルト大正、昭和、戦後のひととき」湯浅篤志著ヒラヤマ探偵文庫刊」
- ▼林嗣夫「詩集わが方丈記」林嗣夫著土曜美術社出版販売刊」
- ▼宮地弥生「ピキニの海のねがい」紙芝居
- ▼森本忠彦「南の風社刊」
- ▼高知ベンクラブ「高知文芸年鑑2024年版」高知文芸年鑑編集委員会編
- ▼高知ベンクラブ刊
- ▼河出書房新社「夏目漱石解体全書増補版」香日ゆら著「河出書房新社刊」
- ▼窮理舎・窮理25号「伊崎修通編」窮理舎刊」
- ▼小学館「サライ709号」三浦一夫編
- ▼小学館刊
- ▼ワン・パブリッシング「ムー524号
- ▼廣瀬有二編「ワン・パブリッシング刊」

文学マイスター講座 好評開講中

高知県立文学館では年間を通じて連続講座「文学マイスター講座」を毎年開催しています。今年度のテーマは「王朝文学」。県内外でご活躍中の講師をお招きし、開講中です。大河ドラマの影響か、例年より多くの受講申し込みをいただき、嬉しい悲鳴となりました。

講座の前期は『源氏物語』の現代語訳をした作家たちに関する講義でした。与謝野晶子、谷崎潤一郎、瀬戸内寂聴など、名だたる作家たちが訳を成し遂げ、現在でも多くの人々に親しまれています。それぞれの作家の『源氏物語』との出会い、現代語訳の手法や特徴、作家同士の交流など、数々の貴重なお話をうかがうことができました。講師の先生方の専門的かつ明快な講義に、「あれも知りたい、これも知りたい」と毎回興味が尽きません。

ある回では、訳の読み比べをする時間があり、受講生の皆さんが興味深そうに読みながら感想をつぶやいている姿が印象的でした。メモをとりながら講義に熱心に耳を傾け、学び続ける姿勢は素晴らしく、こちらにも感銘を受けています。



講義の様子

後期は『更級日記』や『土佐日記』などの文学作品を学びます。『源氏物語』は文学史で存在感の大きい作品のひとつですが、平安時代には他にもたくさんさんの物語、日記文学作品が描かれました。新たな平安文学との出会いが待っているかもしれません。どうぞご期待ください。

なお、今年度の受講生募集は終了しておりますが、来年度以降も文学に関する旬なテーマを取り上げ、文学の素養や探求心を高めることのできる講座にしていければと思います。今後、ぜひご注目ください。

(学芸課/笠岡花菜子)

第27回児童生徒文学作品朗読 コンクール今年も開催!

今年度は24校、総勢75名の皆さんから応募をいただき、一人ひとりの一生懸命な姿と表情豊かな朗読に、胸が熱くなりました。11月の県審査では、特別審査委員にRKC高知放送キャスターの井手上恵さんをお招きして記念講演会を予定しています。審査会、講演会は入場無料となっておりますので、子どもたちの日頃の努力の成果を、ぜひ会場でご覧ください。

①地区審査(開催済)

・東部会場

田野町ふれあいセンター

多目的会議室

8月12日(月・祝) 午前10時～

・高知会場

高知県立文学館 1階ホール

8月18日(日) 午後1時～

8月19日(月) 午前9時30分～

・西部会場

大方あかつき館レクチャーホール

8月27日(火) 午前10時30分～

②県審査・記念講演会(公開)

・高知県立文学館 1階ホール

11月10日(日) 午後1時～

各地区審査より選出された児童生徒の皆さんが県審査に出場します。

(学芸課/常安紀恵)

夏休み

出張おはなし キャラバン

報告

文学館の教育普及活動のひとつである、土佐民話の紙芝居や絵本の読み聞かせ「おはなしキャラバン」。夏休みは「出張おはなしキャラバン」として、高知市内の小学校児童クラブ22校を訪れました。



紙芝居・絵本の読み聞かせをするのは、日ごろから館を支えてくださっているカルチャーサポーターのみなさんです。その熟練の語り口に、子どもたちは物語の世界に入り込んでいる様子で、身を乗り出すようにして聞いてくれました。紙芝居は、紙芝居舞台や拍子木を使うなど演出にもこだわっており、とても新鮮に映るのではないのでしょうか。民話を通じて、ふるさと高知への思いを育んでくれれば嬉しいですね。

もちろん、絵本の読み聞かせも人気です。「この本知っちゃうー!」と元気に答えてくれたり、感想を言ってくれたら子もいました。

この出張おはなしキャラバンは、大変ありがたいことに毎年の恒例行事となっております。夏休みのイベントとして子どもたちに楽しみにしてもらえよう、今後も意欲的に取り組むたいと思います。

(学芸課/笠岡花菜子)



風の中にも秋の気配を感じる季節となりました。

当館では夏企画「創刊45周年記念ムー展」謎と不思議に挑む夏〜」が開催中です。連日多くのお子様

連れやムー民のお客様に、ご来館頂き、夏休みらしい賑わいを見せています。

ショップでは、月刊ムー創刊45周年グッズ（キーホルダー・ステッカー・マグカップ・トートバッグなど）や関連書籍を多く取り揃えています。

特にTシャツは大人気で、皆様バックプリントやサイズを確認しながら、お気に入りをお手に取られています。



月刊ムー関連のグッズや書籍が一堂に集まる機会はなかなかないのではないのでしょうか。

ムー展をご覧になった後は、ぜひミュージアムショップにもお立ち寄りください。

（総務事業課／北川智絵）

館長エッセイ

多様性を認め合う

社会にこそ哲学を

澤田博睦

藤並の森に佇む文学館に着任して、はや2か月。朝、森の入口で高知城を写真に撮るのが日課となりました。真っ青な空に映える高知城がお堀の水面にくっきりと浮かぶ姿に、一日のパワーをいただいた気分です。とても嬉しくなります。

そして、さらに不思議なパワーに引き寄せられるように館内へ……

夏休みの企画展「ムー展」謎と不思議に挑む夏〜（9月16日まで）も最終盤を迎え、これまでに大変多くの方にご来館いただきました。怪しげなモノ、不思議なことに対して、想像力や知的好奇心を全開にして「言葉の力」で謎に挑戦する。そうした愉しさに浸る夏になったことでしょう。

「言葉の力」といえば、最近「哲学」に関心をもつ友人が多くなりました。海

外出張の多い友人は、ビジネスの世界で外国人とお互いのスタンスを理解しあうために、相手国の宗教を知り、自国の文化や考え方を語る事が重要だと言います。宗教色の薄い日本人は、哲学を持ってないと対等な会話ができる相手として認めてもらえないのだそうです。「今まで、いかに自分の考えを言葉にして来なかったかを痛感するよ。」と、しみじみ語る横顔が印象的でした。

多様性を認め合う社会に生きる時代だからこそ、言葉で自らを語る哲学的な素養を身に付けることが重要なかもしれません。そしてそこには、文学館が果たせる役割も大きいものがあると感じるのです。



* 新職員の紹介 *

7月より、わくわくいっぱいムー展開催中の文学館で勤務しております。

まだ不慣れですが、正確・迅速・丁寧を心がけます。お客様に存分に文学館を楽しんでいただけるよう、そしてウェルビーイング（幸せ、こころの豊かさ）を感じるお手伝いのできると思えます。ぜひお誘い合わせのうえご来館くださいませ。

（総務事業課／森光美和）

創刊45周年記念 ムー展

～謎と不思議に挑む夏～

- 会期 令和6年7月6日(土) ≫ 令和6年9月16日(月祝)
- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 場所 高知県立文学館2階 企画展示室
- 観覧料 500円(常設展含む) 長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

展示会の紹介をしています! 詳しくは2ページ目をご覧ください。



©月刊ムー



追悼 市原麟一郎先生

～土佐民話よ、永遠に～

- 会期 令和6年10月5日(土) ≫ 令和7年1月5日(日)
- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 休館日 年末年始(12月27日～1月1日)
- 場所 高知県立文学館2階 企画展示室
- 観覧料 500円(常設展含む) 長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

展示会の紹介をしています! 詳しくは表紙・3ページ目をご覧ください。



撮影:渡辺 裕二氏



様々な関連イベントを計画しています。

▶ 記念講演会「土佐の民話を訪ねて」

- 講師: 国立歴史民俗博物館名誉教授 常光徹氏
- 日時 令和6年10月20日(日) 午後2時～3時30分
 - 定員 100名
 - 場所 高知県立文学館1階 ホール
 - 参加費 要当日観覧券
 - 申込方法 電話または文学館受付にて事前申込

▶ 民話散歩

- 土佐民話のふるさとをバスで巡ります。
- 日時 令和6年11月30日(土) 午前9時～午後4時30分(予定)
 - 定員 30名 先着順
 - 参加費 3,500円(昼食込)
 - 申込方法 高知新聞観光 088-825-4334

▶ クイズイベント

- 自分たちが住むこの高知に伝わる民話を詳しく知ろう! 市原先生がこよなく愛した土佐のおどけ者缶バッジなどをプレゼント!
- 日時: 10月5日(土)、6日(日)、12月14日(土)、15日(日) 令和7年1月4日(土)、5日(日) 各日午前10時～午後4時

▶ 工作イベント でんでんだいこ作り

- 土佐民話をモチーフにした、でんでんだいこを作ろう!
- 日時 令和6年10月27日(日)、12月1日(日) 各日午後2時～4時
 - 参加費 要当日観覧券
 - 定員 各日30名
 - 場所 高知県立文学館1階 ホール
 - 申込方法 電話または文学館受付にて申込 先着順

高知県立文学館で開催する企画展・その他事業は職員全員で消毒・清掃を行い、安心・安全に利用いただけるよう感染予防・拡大防止対策を行っております。

利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休 ※その他、メンテナンス等で臨時休館することがあります。
- 観覧料 常設展一般370円 企画展はそれぞれ異なります。20名以上の団体は2割引。高校生以下無料。身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者(1名)、高知県・高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。(窓口で手帳等のご提示をお願いする場合があります)
- 駐車場 なし。ただし近隣に有料駐車場があります。
- 附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
- 貸出施設 企画展示室、ホール、茶室
- 運営 公益財団法人 高知県文化財団

交通のご案内



- JR高知駅から徒歩20分(またはバス・路面電車を利用)
- バス・路面電車「高知城前」から徒歩5分
- 高知龍馬空港から空港連絡バス「北はりまや橋」下車、徒歩20分

高知県立文学館

〒780-0850 高知市丸ノ内1丁目1-20 電話 088-822-0231 FAX 088-871-7857

高知県立文学館 検索

